

芝生広場石造物の解説



◆ 用語解説 ◆

道標	通行人の便宜のために、方向・距離などを記して道端に立てた表示物
道路元標	道路の基点・終点または主な経過地を表示する標識
標石	目印の石
常夜燈	金毘羅街道の道筋に立てられ、一晩中あかりを灯していた
丁石	金毘羅参詣の道しるべとして一町ごとに立てられた標石
もやい石	船をつなぎ止めるための石
カ石	力試しに用いた石 神社などに置いて、若者が持ち上げたり担ぎ上げたりして力比べをした
玉垣	神社などの聖域を囲む垣根
親柱	橋の欄干にある太い柱

石に名を刻まれた人たち

- あまがさきりや 尼崎里也**
里也は風袋町の足軽、尼崎幸右衛門の息女。父の仇討ちをするために江戸に出て剣術修行に励みながら敵を捜し出し、宝永2(1705)年に仇討ちを遂げる。
- しん 真 ねん 念**
(生年不詳~1691年)
真言宗の僧で四国遍路の旅行案内書である『四国辺路道指南』『四国遍礼功德記』を出版したり、遍路道の道標を設置するなど四国遍路の普及に努めた。四国遍路の父ともいわれる。
- なかむらやはんざえもん 中村屋半左衛門**
江戸時代中期から明治時代にかけて、数代続いて活躍した丸亀の石工。石庭にある灯籠を造った中村屋半左衛門藤原清品の灯籠・狛犬の作例は多く、新堀港にある江戸講中灯籠(太助灯籠)の台座にも記名がある。

! ご観覧の際には、足元と頭上などにご注意ください。



芝生広場全景

芝生広場石造物について

ここに展示している石造物は、かつては、丸亀市内の道ばたや港などにあったもので、近年のさまざまな開発事業などにより、移転されてきたものです。道は古来、物流、人びとの往来、そして文化の交流などの舞台となってきました。

道ばたに立てられていた道標や常夜燈は、人びとに行き先を示し、ときには疲れた旅人を癒し、励ましたこともあったでしょう。

ここにはその他に、境界石、標石、もやい石、橋の欄干の親柱、道路元標などさまざまな石造物があります。これらは郷土の歴史を知る上で極めて重要なものです。



コダイヤモンドの化石

中生代白亜紀の海に生えていた海草コダイヤモンドが化石となったものと考えられていたが、現在では海底に住んでいた生物の這い跡とする見解もある。

松山市の南部から東へ、香川県と徳島県の県境にある讃岐山脈、淡路島南部を通り、紀伊半島の和泉山脈まで続く和泉層群から産出する化石が有名。アヤマ石ともよばれる。

この石塔は経年劣化による危険が生じたため、移動しました。

石塔

丸亀城下の見附屋の庭園にあったという説もある、豊島石で造られた層塔。

見附屋は山崎氏が丸亀藩主となった時代に多度津より移って来て、通町に土地を与えられ屋敷を構えた。代々町政を司る大年寄をつとめた旧家で、見事な蘇鉄の生えた庭園美で有名となった。

